

第 6 回

武蔵野市教育基本計画（仮称）策定委員会

武蔵野市教育委員会

第6回武蔵野市教育基本計画（仮称）策定委員会

○平成21年6月30日（火曜日）

○出席委員

葉養委員長 小島副委員長 松澤委員 本郷委員 井原委員 安藤委員
原委員 田中委員 磯川委員 萱場委員

○事務局出席者

山上教育長 秋山教育企画課長 鈴木指導課長 石代統括指導主事
大平教育支援課長 平岡給食課長 隅田指導主事

○日程

1 開会

2 議事

(1) 現代社会の諸課題に対応する教育の推進について

① 現在の状況把握と今後取組むべき事項について

(2) 武蔵野市が目指す教育の方向性について

① これまでの策定委員会を振り返って

3 その他

午後 7時00分開会

○秋山教育企画課長 皆さん、こんばんは。

お忙しい中、第6回目になりますけれども、教育基本計画（仮称）策定委員会にご出席いただきましてありがとうございます。

本日、小山田委員が欠席です。それから本郷委員が8時半で途中退席させていただきますので、ご了承いただきたいと思います。

初めに、資料の確認をさせていただきます。

事前にお配りしたものではまず次第がございます。それから、A3の横版で武蔵野市教育基本計画の体系（案3）、資料1になります。それから、資料2-1、現代社会の諸課題に対する教育の推進、これは本日差しかえということで置かせていただきましたので、郵送の資料ではなくて、本日机上配付した資料をお使いいただければと思います。それから、資料2-2、これも諸課題に関してA4の横版になります。それから、資料3、これまでの策定委員会を振り返ってということで、皆さんのご意見の主なところをまとめさせていただいたものでございます。

それから、本日新たに配付させていただいた資料が資料4、これからの進行予定を配らせていただきました。最初にその部分を説明させていただきます。

きょうが、第6回目ということで、最後の体系の部分で、現代の諸課題に対応する教育の推進をご議論いただきまして、2番目に、目指す教育の方向性について、これから武蔵野市がどんな教育を目指していくのか、どんな子どもを育てていくのかというところに関してご意見をいただきまして、次回7月29日がその部分のまとめ、それから中間まとめの骨子を出したいと思っています。8月25日が中間まとめ案、9月には中間まとめを確定させていただきたいと思います。

その後、中間まとめを公表、ホームページおよび教育関係の部署等に中間まとめを置きまして、市民からのパブリックコメントを受けていきます。あわせて、文教委員会になりますけれども、議会にも報告をしていくところでございます。

第10回が11月になりまして、それらの市民意見の取り扱いとか、どういう形で整理していくかを協議しながら、12月に第11回最終案、それから1月になりますけれども、最終回として最終案をまとめていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、きょう新たに冊子を3つ配付させていただきました。これは、参考資料ということで配らせていただきましたけれども、平成20年度に2つ計画ができて、1つがスポーツ振興計画、それからもう一つが特別支援教育の計画になります。特に、特別支援教育に関しては、学校教育の部分と関連がございますので、概要版がございま

すので、いずれ関係するところもあると思いますので、お目通しいただければと思います。

それから、青い冊子で教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価報告書というものでございまして、これは地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正になりまして、平成20年度より、教育委員会の事務の管理及び執行に関して、点検及び評価を行って、議会に報告するとともに公表するという事になったものでございます。この冊子につきましては平成20年度の上半期分についてまとめ、3月に議会に報告している状況でございます。平成20年度全体の報告につきましては、9月に向けて今作成を始めている状況でございます。これも、何かの折に参考に見ていただければと思います。

資料の説明は以上でございますけれども、何かご質問等あれば。なければ、委員長のほうで、よろしく願いいたします。

- 葉養委員長　こんばんは。大分押し迫ってまいりまして、本日は6回目ということで、本日は特に現代社会の諸課題に対応する教育の推進についてという箇所についてご議論いただければということで用意していただいております。

それでは、まず事務局のほうから資料1、それから資料2-1、資料2-2につきましてご説明をよろしく願いいたします。

- 石代統括指導主事　それでは、事務局から説明をさせていただきます。

まず資料1、武蔵野市教育基本計画の体系、第3案をごらんください。

基本計画の体系、第3案につきましては、最初に前回の第5回の基本計画策定委員会にお出ししたものと変更点が何点かありますので説明をさせていただきます。

まず、用紙の一番左側の部分です。前回、この部分「次代を担う子どもたちの豊かな成長を願って」と記載しておりましたが、これを今回武蔵野市が目指すこれからの学校教育と変更しています。

この部分は、この計画の全体にかかるメッセージ的な意味合いを持つものとなります。すなわち、武蔵野市ではどのような子どもを育てていくのか、あるいはどのような学校をつくっていくのか、これからの学校教育の方向性のようなものです。したがって、これから中間報告をまとめていく中で、策定委員の皆様とご意見をいただきながら一緒に考えていきたいと思っております。

そう考えたとき、前回までの「次代を担う子どもたちの豊かな成長を願って」という表記では、今後考えていく上でイメージを限定してしまうというようなことを考えましたので、ここはオーソドックスに武蔵野市が目指すこれからの学校教育とさせていただきます。

きました。これが1点目です。

次に2点目、7つの基本方針の中で、今回議論していただく予定の箇所ですが、前回の資料では「時代の要請にこたえる力の育成」と表記をしておりました。これを今回、「現代社会の諸課題に対応する教育の推進」と変更させていただきました。

時代の要請にこたえる力の育成という表記ですと、その上にある同列に記載していますが、確かな学力の向上、豊かな心の育成、健やかな体の育成と重なる部分がありまして、施策の方向性をつくっていくときに混乱を招く恐れがあると考えまして、他の基本方針との区別がしやすいこの標記に改めさせていただきました。本日、議論をいただく内容につきましては変更はありませんので、よろしく申し上げます。

それから3つ目です。用紙の一番右側の太い矢印の部分でございます。

前回の資料では、今後重点的に取り組む推進事項として、この欄には策定委員のご意見や事務局の検討課題、その他一般的に考えられる取り組みなど事業名を挙げさせていただいております。委員の皆様が具体的な施策や事業を議論する際、どのような中身を議論したらいいかということで、わかりやすいようにという趣旨で記載しましたが、資料の読み方によっては、今後武蔵野市教育委員会が具体的に進めていくつもりであると、断定的にそうするというふうに取り上げられてしまうことも考えられますので、今回第3案を提示するに当たって削除させていただきました。そして、名称も今後の方向という表記にさせていただきました。

今後、中間まとめ完成版を作成していくに当たって、本市の実態や、あるいは他の事業、あるいは他の部課との調整等も考えまして、さらに予算的に可能かどうかということも十分検討いたしまして、この欄は作成したいと考えております。

以上が基本計画の体系の変更点でございます。よろしいでしょうか。

続きまして、それでは今回子どもたちの「生きる力」の育成についての基本方針の4番目です。現代社会の諸課題に対応する教育の推進について、視点を絞って議論していただきたいと思います。

この部分に対しての施策の方向性ですが、今回環境教育、情報教育、そしてキャリア教育、食育を今後重点的に進めようと考えています。それでは、これらの4つの教育について、その必要性、また方向性をまとめましたので説明をさせていただきます。

なお、先ほど司会からありましたように、資料2-1は本日修正をさせていただきましたので、ご了承をいただきたいと思います。

それでは、資料2-1でございます。

環境教育ということで、エネルギー環境問題というのは、ご存じのとおり私たち人類

が生きていく上では大きな問題となっています。

また、特に資源の乏しい日本においては重大な問題です。子どもたちには、環境や自然と人間とのかかわりについて考えさせたり、それによって今後環境問題と自分自身の生活について、どのようにかかわっていくか、環境の保全の部分、あるいはよりよい環境をつくっていく視点ということから実践する態度や資質、能力を育成することが大切と考えております。

また、2番目の情報教育です。一言で言うと、問題としては急激に進む情報化社会です。パソコンや携帯電話などの普及によって、子どもたちを取り巻く環境、これが以前に比べると随分変化をしております。そのような中、インターネットを利活用すれば、だれにでもたくさんの情報を収集することができるようになりました。また、さまざまな情報を収集したり発信したりすることもできます。

子どもたちがICTの機器を効果的に活用できること、そして情報活用能力をはぐくんでいくということが、今後ますます重要かと考えております。

3番目に、キャリア教育です。現在、世界的に非常に不況の中、雇用の多様化だとか、産業や経済の構造などの変化が問題となっています。こういった背景から子どもたちの進路を決めるということにおいても変化が恐らく出てくるでしょう。今後も子どもたちが予想もつかないようなさまざまな問題が起こると思っております。そうしたとき、柔軟でかつたくましく対応して、社会人として自立できるようなそのような子どもたちということで、今後社会とのかかわりを意識させるとともに、健全な職業観や勤労観を育んでいくというふうに考えております。

そして、最後が食育です。今年度、改正学校給食法の施行と新学習指導要領においても、食育の推進というのが明確化されてきました。また、平成17年度には食育基本法も施行されております。学校においても、各教科の授業を通じて食についての理解を深めるとともに、望ましい食習慣を養うことが求められております。

生活習慣や食習慣というのは、一義的には家庭が第一だというふうに考えてはいますが、今後家庭や地域とともに、学校も連携をとりながら食育に取り組んでいくことが大切だと考え、食育ということをここで挙げさせていただきました。

以上、7つの基本方針の1つ、現代社会の諸課題に対応する教育の推進の中で、この4つを推進していきたいと考えております。これらの4つの教育を学校では1つの決められた教科の授業としてではなく、幾つかの関連深い教科を中心に、よく横断的ということが言われますが、扱っていくことになると思います。

例えば、環境教育でいえば社会科では地球温暖化などの環境問題だとか、あるいは資

源エネルギー問題として扱ったり、理科では武蔵野ビオトープなどを使って、自然保護や自然保全の人間の役割などの学習をしたり、また家庭科ではライフスタイルを考えたりというようなことでも横断的に学んでいくというような形です。

以上、資料2-1ということでざっと説明させていただきました。恐らく、このほかにも何々教育ということでいろいろな教育が今あるというふうに考えておりますが、今回この4つ、優先的にかつ重点的にということで挙げさせていただいています。よろしいでしょうか。

それでは、3枚目の資料2-2ということで説明をさせていただきます。

ここでは、この4つの教育の推進についてですが、教育委員会、そして学校での取り組みをまとめたのでご紹介します。

ただし、この取り組みに関しましては、小学校と中学校、あるいは教育委員会が指定しているようなモデル校等では多少差があります。したがって、ここに書かれていることが、各学校ですべて一律に行っていることではありませんので、まずご承知おきください。

また、各教育について課題として認識していることを右側に提示させていただきました。後ほどご意見をいただきたいと思っております。

では、上のほうからこれも説明をさせていただきたいと思っております。

まず、環境教育の推進ですが、これは武蔵野市全体でもISO14001を取得しております。学校においても、各学校で電気、水道の使用量調査をはじめ、ごみの分別やポスター、環境新聞などの発行に積極的に取り組んでいただいております。

また、教育委員会としては環境教育に関する学校施設、例えば先ほど言いましたビオトープ、それから太陽光発電のパネル、それから燃料電池などの設置を行っております。

それを受け、学校ではビオトープを使った水辺の動植物の観察や太陽光発電の状況を示す液晶パネルをグラフ化することによって、子どもたちの意識を高めていただいております。

また、学校ではクリーンセンターの見学や、近隣のごみステーションの調査なども行っておりまして、家庭内のごみの処理やリサイクルの実践を行ったり、燃料電池や地球温暖化、電気づくり方などをテーマに、東京ガスや東京電力といった企業等の出張事業を行っていただいたりしております。

そのような中、課題として2点挙げさせていただいております。

1つは上下逆になるんですけども、学校、家庭、地域で子どもたちが学んだことを、今後具体的にどのように実践していくか、それから自然や生命を尊重する心というか精

神というか、あるいは感受性をどう育てていくか、その支援として教育委員会や学校がどう今後かかわっていくかが課題だと認識しております。

続きまして、情報教育の推進です。

情報教育推進委員会というものを設置しております、ICT機器を授業において効果的に活用する方法などを協議したり、校内LANを活用した配信コンテンツの取り組み状況を情報交換などしています。

また、ホームページの活用、あるいは更新に関する指導、助言をここではしておりません。

ICT機器の学校での活用状況ですが、現在調べ学習等授業でパソコンを活用している教員は、全体で約50%、また75%の教員が週に二、三回はインターネットを活用して教材づくりをしているという調査結果が武蔵野市でも出ております。

また、各学校では各教科や総合的な学習の時間で調べ学習のほかデジカメやデジタルビデオを使って、植物の観察日記をつけたり、子どもたちがパワーポイントを使って発表したりという活動が見られます。

また、これも調査結果なんですけれども、昨年の調査で中学生の6人に1人、小学生の8人に1人、3年生以上ですが、インターネットやメールでのトラブルの経験があるという調査が上がってきております。ネットワーク上のルールやマナー、あるいは危険の回避、あるいはプライバシーの保護等情報モラルの学習も行っているところではあります。

このような中、一層授業におけるICT機器の効果的な活用や、あるいは子どもたちが主体的にこの機器を使いこなせるようになること、そして先ほどのデータではありませんが、ICTの整備によって起こったトラブル等を回避できるような情報モラル教育も今後推進していくということが課題だと思っております。

続きまして3番目、キャリア教育の推進です。

教育委員会としては、進路指導担当者会を設置してまして、子どもたちの進路の学習だけではなくて、例えば望ましい職業観や勤労観の育成や、子どもたちが自分の意思や能力で職業などを決められるというような、そのような力を図るための実践事例もそこでは指導助言をしております。

また、中学2年生が実施している職場体験学習等に関して、事業所関係だとか、あるいは保険や検査などにも教育委員会が積極的にかかわっています。

また、小学校では特に将来の夢を考えさせたり、自分の個性やよさを理解したり、他者とのかかわりなどということで、このキャリア教育を行っています。

また、中学校では積極的に職場体験をしたり、上級学校訪問をしたりということで、体験的な学習を行っております。

このような中、課題としては今子どもたちが、学校で学んでいることが将来どのように役立つのか、学ぶ意義づけと将来の職業の関係を持つことや、あるいは職場体験等において地域社会での受け入れがなかなか不況の影響で困難になっている、このようなことも教育委員会としては何とかしていきたいなというふうに考えております。

最後になりましたが、食育の推進です。これにつきましては、一昨年ぐらいから非常に教育委員会でもかかわっております。まずは、食育リーダー研修会というのを開催していきまして、各校の食育担当者に研修を行い、校内での食育活動の推進を図っております。

また、全体計画を作成したり、先進校の取り組みの紹介、また各校での取り組み状況を共有したりもしております。食育モデル校を指定し、取り組みを各校に広げたりもしております。

さらに、これは給食課とも連携をいたしまして、栄養士、調理師による栄養指導、あるいは保護者試食会、料理教室なども行いまして啓発を図っております。

各校では、食育リーダーを中心として校内の食育推進組織を整備していただいているとともに、食育の全体計画を作成いたしまして、各教科でどのように食育にかかわっているか、特色ある活動を計画的、系統的に実践していただいております。

また、モデル校では給食委員会による食に関するマナーや栄養の指導放送をしたり、給食だよりや保健だよりを発行したりもしております。

また、縦割り班や兄弟学級で給食を一緒に食べるというようなふれあい給食、なかよし給食など食の楽しさや大切さの理解を図っている学校もございます。

このような中で、地域と連携した望ましい食習慣の改善や各学校での食育の充実というものを今後一層進めることを課題として認識をしております。

以上、資料3つを使いまして、早口ですが説明をさせていただきました。よろしくお願いいたします。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

これからの1時間半ぐらいをどういう区分で進めていくかという話をさせていただきますと、およそあと35分ぐらいの間、現代社会の諸課題に対応する教育の推進についてという柱についてご議論いただければと思います。後半の20時から20時55分ぐらいの時間帯につきましては、資料説明がまだされておられませんけれども、武蔵野市が目指す教育の方向性についてということで、これまでお出しいただきましたご意見等をまとめら

れた資料がございますので、それを基礎にして全体的な方向性についてご議論いただければということを考えております。

それでは、ただいま事務局のほうからかなり丁寧にご説明いただきました。環境教育と、それから情報教育、キャリア教育、食育といういずれもかなり重要な柱になっている領域を取り上げているわけですが、それぞれの分野につきまして、委員がどういう評価をされているか、取り組みの状況、それをどういうふうにお感じになっているかというあたりから少しお話を出していただければと思います。

どういう柱についてでも結構でございます。何かございませんでしょうか。どんなことでも。

○磯川委員 質問になるかどうかなんですけれども、資料2-1という縦長ので1番の環境教育から4番の食育の推進までご説明がございましたけれども、具体的な教科として、例えば1番の環境教育については社会科であるとか家庭科というようなことを挙げていただいたんですけれども、2、3、4というのは具体的なそういうのはあるんですか。教科に対応する部分で、ここでは例えば情報教育というのは具体的にどんなことをしているのかなと思うんですけれども。学校で実際に今やっていることというのは。

○石代統括指導主事 まず1つは、情報機器、ICT機器を活用するということで、これに関しましては非常に各教科ごとに調べ学習等で子どもたちは……

○磯川委員 教科内でその機器を使うという形でやっているということですか。

○石代統括指導主事 そうです、それがまず1つです。

それとあと、中学生でいえば、技術・家庭科などには、コンピュータを使った教科の中の単元がありますので、そこで学習をしたりしております。

○磯川委員 技術・家庭科というんですか。

○石代統括指導主事 技術・家庭科の技術の部分です。

また、中には総合的な学習の時間の中でコンピュータのスキル、そういった今後に活用するという生きる力ではないですけれども、総合的な学習の時間の中でスキル学習をしている学校もございます。こういった形でよろしいですか。

○磯川委員 はい。

○石代統括指導主事 キャリア教育に関しましては、総合的な学習の時間、そして特別活動、進路学習のところで行っている学校が多いと思います。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

ほかにごございませんでしょうか。どういう箇所についてでも結構でございます。あるいはご質問等もございましたらご遠慮なさらないでお願いしたいと思っておりますがいかがで

しょうか。

○安藤委員 キャリア教育のところですけども、土曜学校のほうでたしか子ども経営学教室というのをやっているんですけども、それはジュニア・アチーブメントといって、アメリカのプログラムも取り入れたもので、経営学教室ということなんですけれども、それと同じジュニア・アチーブメントでやっているプログラムで、子どもさんたちに実際に例えばセブンイレブンの店長になってもらって、お客さんも子どもで体験するというのを、実際にお店がつくってある場所でやっているというのを品川でやっているのを見てきたんです。

それを見てきたときに、それはアメリカのプログラムだったんですけども、武蔵野の力をもってすれば、武蔵野版で例えば青年会議所とか、それから商工会の人たちが協力して、そういう1つのまちをつくる、どこかの場所、別に定時にずっとつくっておくというものではなくて、勉強するときにだけさっとつくればいいと思うんですけども、それで実際に職業を体験するというプログラムを、武蔵野であればつくり上げることができるのではないかなというふうに感じました。もちろん、それは協力する地域の人間がいればということなんです。

あともう一つは、中学生の職場体験で私は自分の子どもも経験したこともあって、ただ行ってくるだけなんです。場を見てくるだけだったので、ちょっと不満を持ってまして、もう一つジュニア・アチーブメントでやっていたジョブシャドウ、これは東京都の教育委員会が高校生のほうで取り入れてましたけれども、仕事の場所を見るんじゃなくて、仕事をやっている1人の個人の1日を追うんです。ずっと、その人がパソコンで何かやったり、どこかの伝票を持って会計のところに行った、その書類がまた戻ってきてという、1人の人の仕事を追っていくんです。

そういうプログラムなども、恐らく中学生の職場体験は武蔵野市に限らず自分でアポイントメントをとって、行きたい職業に行ったりもしていましたから、武蔵野に限ることはないとは思うんですけども、私は仕事の場を見るというよりも、仕事をやっている人を追うという観点がすごくいいなというふうに思ったものですから、そういうことも含めて武蔵野のキャリア教育のプログラムというのがつかれるんじゃないかなという思いがあるものですから、ちょっとお話をさせていただきました。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

キャリア教育の領域は、官庁などでいうと経産省とタイアップしたりとか、文部科学省の中にもあるんですけども、生涯学習局が中心になって、国研の中にもこのキャリア教育担当の研究会員がいるんですけども、ちょっと横につながった形で進んでいる

ところがあるんです。品川のはスチューデントシティとかそういうあれですよ。

ほかにかがでしようか。

- 磯川委員 全く場違いな意見かも知れないんですけども、この4つの中で、今おっしゃられたキャリア教育というのだけが、ちょっと僕ぴんとこないんです。というのはどういうことかという、どういうことなんだろうなと思って、2枚目の横長のやつを見ていて、こうか、それは進路指導のことを言ってるのかなというふうに思ったので、その部分なら間違いなくあるだろうなと。

だけど、大半の人たちは特に武蔵野などは進路指導といったら進学のほうにいらっしゃいますよね。だから、ちょっとこれ言葉の遊びみたいなどころがありはしないかなという気がちょっとしたんです。

実際に、自分の大人になってからどういう職業についていくかという部分に、僕は小学校、中学校の段階でわずかな時間体験をさせてもらったからといって、そんなものが役に立つかというふうに、非常にこの部分に関してはちょっと疑問に思います。安藤委員がおっしゃられたような、いろいろな教育プログラムのことは考えられるとは思いますが、安藤さんに別に反対するわけじゃないですけども、キャリア教育ということ自体が本当に小・中という部分で、そんなに取り上げなければいけないことかなという、ちょっとそんな気持ちを持ったんですけども。

- 葉養委員長 どうもありがとうございます。かなりポイントになると思います。

- 安藤委員 ジュニア・アチーブメントのプログラムも、何かを体験させることを一番にしているのではなくて、自分の意思決定をして、その意思決定には責任がついて回るんだということを知らしめるということが一番の目標にしているというふうに聞いてます。ですから、最初の資料の2-1にもありましたけれども、将来の夢を持ち、自分のことは主体的に自分で決める子どもという部分には当てはまってくるかなというふうに考えていたんですけども。

- 磯川委員 それこそ、総合学習の中で例えば働くということは一体どういうことなんだろうとか、それから職業というもの、職業に貴賤なしなんて言葉ありますよね。それが、一体どういう意味合いを持っているんだろうとか、そういう問題意識を子どもたちに与えて、子どもたちの心に火をつけていくようなことというのは必要だと思うんです。

だけど、自分のそれこそ学校を卒業して、どういう職業につくかみたいなどころのアドバイスを小学校、中学校にやってみても始まらないという気が私はします、正直言って。

例えば、哲学的な意味合いでの働くことだとか、そういうことというのは当然どこかのところで学んでいくということだと思えるので、もちろんそういう部分というのは大事だと思えますけれども、それはあくまで思想形成の中で行われることじゃないかなという気がするんです。ちょっとこれ見ると、派遣問題だとかその辺がベースとしてあるのかもしれませんが、もう一つぴんとこないんです、私は。

○安藤委員 サラリーマンの親が多くなって、自分の親ですらどういう仕事をしているのかという、例えば先生であれば子どもたちは先生という職業を見ているんですけれども、あと農業とかそういうのは見てるんですけれども、それ以外にもどんな職業があって、どんなことをしているかということの体験というのは私は必要ではないかなという思いがあるんですけれども。

○磯川委員 世の中にどんな仕事をしている人たちがいるみたいなことはもちろんそういう部分は、それこそ吉祥寺のほうの商店の協力などを得てやっていますよね、一小だとかあの辺は。そういう部分を見せてもらうというのは別に悪いことじゃないですけれども、ただキャリア教育の推進とまでいわれるとちょっとどうなんだという気が多少します。

○井原委員 私も、磯川委員のおっしゃられるとおり、これに関しては余りぴんとなくて、おっしゃられたように働くことの意義であるとか、そういうことだったら何となくわかるんです。それから、安藤委員のおっしゃったような職業を選ぶということは責任がついてまわるといふ、その部分はすごくなるほどなと思ったんですけれども。

それから、先ほどおっしゃったここにある学ぶ意義づけと将来の職業との関係というのも、それは今習っている算数なり数学が将来こういう職業のこの部分に役立つんですよということを子どもに知らせたいのかなと思うと、自分の経験上それはそのときにはぴんときてないというのが、もちろん社会に出て働き初めてから役に立っていることというのはいっぱいあるんですけれども、それを意識しながら使っているということはないので、ちょっとその辺がよくわからなかったです。

あと、職場体験というのもそういうことでしたら、僕はできれば年に1日か2日休みをもらって、自分の職場に自分の子どもを連れていく時間をもらうほうがよほどうれしいので、ですからおっしゃられたように一小のほうで近所の商店街でやっているというのは、多分近所の顔見知りのおじさん、おばさんがどう働いているかという部分では、恐らく同じ職業を見るにしても全然意識が違うと思うんです、子どもたちの。だから、ちょっとその辺がよくわからないなと思ったのが1つです。

もう一つは、情報教育のところはまるっきり違う質問で申しわけないんですけれども、今確かに携帯のことだとか、携帯とか何とかというのはメールでのトラブルの部分、そ

れからネット上のいろいろな書き込み等のトラブルだと思うんですけども、それとは切り離して、それから先生方が教材をつくっているという部分とも切り離れた上での、子どもに対してそんなにパソコンとかを使った授業が、この時期に必要なのかどうなのか、ちょっと余りびんどこないんですけども。

別に、コンピュータが悪いとか何とかじゃなくて、自分の職場のことでちょっと申しわけないんですけども、新しく入ってきたものにはまず植木の手入れは一切させないんです。掃除から必ずやらせるんですけども、掃除もいきなり道具を持たせるということは絶対なくて、まず自分の体でまずやりなさいよということから始めるんです。与える道具もくま手かほうきか手ぼうきという小さな竹ぼうきを再生したもの、それも自分でつくらせてやらせるんですけども、何でそんなことをやるかという、まず自分の手とかでやってみないと、どう道具を使っていいのかわからないし、今はエンジンとかモーターでゴミを吹っ飛ばす機械があるんですけども、そんなものを与えたって、使いこなせるわけがないんです。

段階を追っていくと道具を与えてからも、まず手で大きな枝を拾う、次にいきなりほうきで掃いたって中くらいのごみは動かないのでくま手でかき集める、最後にほうきで一定集める、もう一個最後に手ぼうきという小さいので全部なめたようにきれいにさせるといふのをやるんですけども、コンピュータに置きかえたときに、果たしてこの時期の子どもにそんなことが必要なのかなと、トラブルのこともそうなんですけれども、まずふだんの人間関係の中でトラブルが多発しているわけなので、そのところをまずきっちりやって、その上でもうちょっと大きくなってからではだめなのかなと思うんです。

早めに与えてちゃんと、今あるものを例えば携帯だって消し去ることはできないわけですし、パソコンも消し去ることはできないわけですから、ちゃんと間違っていない使い方を教えようというのはすごくわかるんですけども、一足飛びにそういうものが入ってきているような気がして、導入口を変えるか、もしくはもうちょっと年齢を引き上げるということではできないのかなと思ったんですけども、どうなのでしょう。

○安藤委員 年齢を引き上げるというとどれぐらいをお考えですか。

○井原委員 私は自分のことしかわかってないのであれなんですけれども、小学校、中学校では正直必要ないんじゃないと思うんですけども、高校生ぐらいからではだめなものなんですかね。私もパソコンなどは使いますが、子どもも逆に家では一切使ってませんし、ちょっと自分自身も見通しが立たないんです。どうなのでしょう。授業に取り入れるというのはワードとかエクセルの使い方を教えるということなんですか。

違いますよね。情報を集めてくるという部分ですよね。

- 磯川委員 どちらかというとインターネットなんでしょう。情報検索に使っていることがほとんどじゃないんですか、この情報教育というのは。
- 原委員 違います。ちゃんと技術科ではパソコンのリテラシーをきちんと教えます。ですから、道具だけじゃありません。パソコンそのものをきちんと教えています。
- 田中委員 小学校でもそうです。いきなり小学生がインターネットということはあり得ないので、せいぜい調べ学習が始まる5年生あたりからインターネットについてはやりますけれども、それまではいろいろな小学生向けのソフトがありますのでそういったもの。例えば、昔だったら計算はプリントでやってましたけれども、画面で計算ができて、すぐそこで、パソコンの中の先生が来て添削をしてくれるとか、そういうものを使っています。
- 安藤委員 この計画は、これからの10年を見据えた計画をつくっているわけなのだから、今ここでこの情報教育が早いというふうには、私は決して思えないです。実際にもいろいろなトラブルは起きているわけで、そのトラブルが起きないようにという教育も必要だと思うし、起きた後のことも必要だと思うし……
- 磯川委員 それは裏サイトとかそういうことをおっしゃってるんですか。
- 安藤委員 それもそうなんですけれども……、
- 磯川委員 いじめみたいなものとかね。
- 安藤委員 それもそうなんですけれども、健全に機器を使うということを小さいうちからちゃんと覚えてもらいたいなという思いがあります。
- 井原委員 健全に機器を使うという部分では早いんじゃないかなと思う部分もあって、要は情報検索というのもアナログ的な言い方をしますと、図鑑とかそういったもので調べてこいよという話ですよ。まず、調べるということ自体をちゃんと身につけさせてから、実はほかにもツールがあるんですよというふうにしていかないといけないんじゃないかと思います。
- 安藤委員 でも、それは当然じゃないですか。今、5年生からとおっしゃいましたけれども、1、2、3年生でいきなり図鑑使わないでパソコンで調べなさいということはありません。だから5年生の時点では図書館の中の資料を使って調べということをやりました上でパソコンに行くというふうには私は思っていますけれどもいかがでしょうか。
- 田中委員 そうですね。すみません、これさっきまでキャリア教育について話し合っているのですが、いきなりパソコンになっているので、どちらで意見を申し上げていいのかわ

よっと迷っているんですけども。

○原委員 その前に、一番最初に質問しようと思ったのは、現代社会の諸課題という中に、どうしてこの4つを選んだのかというのは、さっきの説明ではちょっと弱いんじゃないのかなと思ったんです。つまり、もっといろいろな諸課題が現代社会にある中で、武蔵野市としてこの4つを選んだというのはなぜなんだろうというところが、根拠というか背景というか、そういったところがさっき説明を聞いてて、私自身はちょっと十分認識できなかったと思っています。

それで、今そういうところで情報教育は早いとか、キャリア教育がという話が出ているのではないかという気がしているんです。

例えば、税の教育、租税教育もあれば消費者教育もあれば、いろいろな現代の中にはあるんですけども、その中からこの4つに絞ったというのは、なぜそんなことを逆に言うかという、このタイトルだとそれこそもっとこういうのもあるんじゃないかということが、いろいろなところから入ってきたときに、学校がパンクしちゃうと思っています。ですから、逆にむしろ今後の基本計画の中にどうしてこの4つが必要なんだという必然性みたいなものをもう少しきちんと理論づけしておかないといけないんじゃないのかなという気がしたんですけども。

○小島副委員長 学習指導要領を改訂するときの背景になった中に、各教科等で横断的に対応してほしいということがかなりの数が出ていて、その中から武蔵野として特に重視したということを選択したんでしょう。

○石代統括指導主事 7つほど、そこには教育課程の中教審の学習指導要領が出る前に出しています。その中では、安全教育があったりとか、その他性教育だとかそういったものもございました。物づくりなどもあったかと思います。

いろいろなものを考えたときに、武蔵野では今このような教育が一番その中でも適しているんじゃないかとか、先ほど言った税の教育も必要ですし、福祉だとか、介護だとか、そういったいろいろな教育は必要だと思います。ただし、現在これを全部やるだけの学校というのは、いろいろなこともやらなければいけないのでできないと思います。

これらが横断的に教科等でもできるということも考えまして、今回この4つを重点的にということで選ばせていただきました背景です。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

学習指導要領が……

○原委員 武蔵野市はISOをやっているんです。だから、環境だというんだったら、これは非常に密接につながっているんだという気がしますし、ちょっとこじつけ的になれば、

中学校でも給食が始まるから食育だということ、だから武蔵野でということであれば、武蔵野がなぜこれを取り上げたのかというあたりを押さえておく必要があるんじゃないのかなというふうに私は思うんです。

○葉養委員長 基礎には、学習指導要領の体系があって、それで何年生からどういう領域を扱うかというのも枠ははめられているという話の中で、多分なかなか本質論まで踏み込んでいると、国が結局学習指導要領の体系をつくっているのだから答えにくいところもあったりとかということなんだろうと思うんです。

結局、素朴に考えると学校というのは無尽蔵に時間があるわけではなくて、一定の時間しかなくて、授業の時間だって一定の時間数しかなくて、その中にいわゆる〇〇教育というのをそんなに入れ込めるのかという、素朴に考えて学校というのは何をやる場所なの、小学校低学年でもしかしたらキャリア教育と情報教育をやるつもりなの、これだけ見るとそういうことも出てきちゃうというのはあると思います。

基本的に、学習指導の枠があって、触れなければいけないということはあるとしても、そもそも学校というのは何を役割とすべきかという、だからそこら辺の基本的な思想というか、無限にアメイバみたいに触手を伸ばして行って、〇〇教育を追求する方向でいくのか、もっと学校には学校のレゾンデートルというか、使命の部分というのがあって、そこがむしろコアなんだという形で絞り込み路線でいくかという、そこら辺のちょっと対立というか、意見の一見するとちょっと対立みたいなのが出ているのかなと思うんです。

でも、非常にすばらしい議論が展開されている。本郷さん、一言ちょっと何か言いたいことあるんじゃないですか。

○本郷委員 いろいろな方向に話が振っていたので、最初キャリア教育のほうで、青年会議所にも入ってますので、いま田中先生のところでミニタウンに協力してやっていますが、小・中学校のうちに体験するということが一番だと思うんです。それは、勉強するのではなくて体験する、ある一瞬でも見た、聞いた、触れたという部分があって、それが将来のキャリアに結びつくという部分がありますので、早過ぎるとか遅過ぎるという部分でいうと、今の現状の考え方でいいのかなと私は思っております。

その中で、キャリアという言い方の書き方がどうしても、イメージがキャリア組とかそういうイメージにとらえられて、よっぽどできた人間をつくらなければいけないみたいなとらえ方をするのではなくて、書いてあるとおり、学ぶ意義づけと将来の職業の関係が少しでも見えればいいのかなど。ただ、ここで頭ごなしにうたってしまうと問題なので、ちょっとこの文面もまだ問題があるのかなと。その辺がぶれているというような、

皆さんのお考えなのかなと聞いていて思いました。

それから、情報教育に関してですけれども、知らないとどんどん悪い方向のを知りたくてしょうがない、知らないことに対してどんどん知りたいというのが子どもたちなので、自分の環境になくても、今コミセンなどに行けばパソコンいじれますし、下手するとインターネットカフェとか、年ごまかして入ろうというのも出てくると思うので、正しい使い方というのをまず教えるというのが大事だと思います。

それと、こういう世界でこういう便利なものなんだよと、正しい方向のことをどんどん教えていけば、変な方向のほうにはいかないだろうと思いますので、その辺の教育は必要ではないかと思えますけれども、あくまでも情報教育の推進というか、どんどんやっていかなければいけないのではなく、時代に相応した対応をしていければいいかなと。ですから、推進教育はその時代に相応した情報教育みたいな書き方を今後10年間やっていけばいいのかなと思います。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

まとめる必要はないんですけれども、この長く細いA3のを見ながら、武蔵野市の教育基本計画の体系というのをつくっていくプロセスの中にいるわけですけれども、子どもたちの生きる力の育成という囲みの下の上4つを今まで議論してきて、きょうは4つ目という一応位置づけになっていて、ただいろいろ原委員もからも出てましたし、皆さんからも出た、現代社会の諸課題に対応する教育の推進、ここが一番下手すると学校というのが、どこが境目かわからなくなるようなところなんです。

多分、これは学校だけではできないし、スチューデントシティもそうだし、ジュニア・アチーブメントも外部機関を入れてますよね。NPOとか民間企業とかを学校の中に取り込んで事業を進めていかなければいけない。そうすると、学校の外側の社会というのはありとあらゆる領域の職種があるわけで、それを全部〇〇教育ってつけて入れ込むということになれば、証券教育もあるし、銀行教育もあるし、法教育というのはもう既に消費者教育と言われて、どんどん入り込んでいく。

その中で、何でこの4つを選んだのかというのが原委員の疑問で、ここは確かに非常に最もなところがあって、交通安全教育もあるし、いろいろなのがあろうと思うんです。福祉教育もあるし、情報もあるし、環境もあるし、いろいろなのがあって、これを特に取り上げたというのは、理由をどこかしらに書き込んでいかないといけないという面があります。

それにしても、ここをどういうスタンスで武蔵野の学校というのをとらえていくのか、仮に小学校でないにしても中学校でこういうあたりを膨らませていって、場合によって

は確かな学力とか心とか体の育成にも増して、こういうところに力点を置くという方向にいくのか、それとも武蔵野の学校というのは、むしろ収れんする方向で、コアをはっきりしていく中で、将来像を描くべきかと考えていくのか、こちら辺はかなり大きな選択肢じゃないかなと思うんですけども、そういう話にちょっと、後段の話につながっている議論になってきてるんです、武蔵野市が目指す教育。

では、ちょっと後段に入る前に事務局から資料3のご説明をいただいて……、どうぞ。
○松澤委員 さっきからどこでどう言えば、話があっちいたりして。今のここの現代社会の諸課題のところで、なぜこの4つを選んだかというようなときに、私は1つの視点として、人間がこの地上で生きていく上で、どうしても自然ということの中で生きていかなければいけないし、それから体を使って、丈夫な体がなければ生きていけない、それから人と人、要するに人間集団、社会の中で生きていかなければいけない、そしてもう一つが働かなければいけない。それは、どこでどう生きていこうとも人間の基本だと思ふんです。そういう視点で見ると、この4つというのはそれぞれどうしても欠かせないことなので、一つ大事かなというふうに思います。

それから、ちょっとずつだけ一通り言わせていただきますと、私は環境教育とかかわって、自然や生命を尊重する精神とか、今武蔵野の小学校や中学校が一番環境学習をやっているのは、ひょっとしたらセカンドスクールじゃないかなと思うんです。このセカンドスクールという言葉が、環境教育の教育委員会の取り組み、学校の取り組み何とかっていうところに全然出てこなかったのは寂しいことで、むしろ一番多分やってるんです。そことのかかわりの部分を入れてほしいなというのが一つです。

それから、情報教育については新しいことを積極的に取り入れるということも大事なんだけど、一方で子どもたちがきちんと対人関係において正しくあいさつしたり、言葉遣いをしたり、そういうことが非常にできなくなっていると。だから、あいさつとか言葉遣いとかはよりよい人間関係を築くための正しい表現力を身につけさせるということも土台に、情報教育のところは考えてほしいなと。

それから、キャリア教育については、さっき疑問だという言葉、私もキャリア教育という言葉は何年か前から文科省が使ったら、急に無理して使わなくなっちゃって、進路指導とかでもいいんじゃないかって、個人的には私も思うんだけど、今手伝いとか、家で働いたりすることをしなくなった子どもたちが、将来自分の職業と直結はしないんだけど、中学校のわずか3日ぐらいの職場体験の中でも働くことの大変さ、それからちょっとしたあいさつがいかに大事だったか、商品を並べることだけでもどれくらい意義があるかとか、すごくそういう働いたということの実感、大変さとやり遂げたときの喜

びみたいなことを子どもたちの感想文ではすごく出てくるわけです。そういう意味で、とても大事だなというふうに思っています。

○磯川委員 キャリア教育の推進とまでいうからちょっと問題なんですかね、言葉が。

○松澤委員 それから、食育のところでは、こちらの2-1のところ、学校教育において指導していくことが強く求められていると書いてあるんだけど、私は食育に関しては、こういう言われ方すると、家庭はしなくてもいいのかというふうにとられるのは非常に違うなど。だから、「学校教育においても」とか、「おいてもきちんと」というふうにしないと、食育は学校任せでいいというふうになるのは違うんじゃないかなという気がします。すみません、幾つか。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。どうぞ。

○田中委員 この4つがなぜ出てきたのかというか、武蔵野ではなくても、今、日本のどこの学校でもそれは確かに1つの大きな課題だというふうに思うんだけど、あえて武蔵野でこれをやりましょうというときの裏側の根拠というか、データというか、そういうものが必要なんだろうなというふうに思うんです。

この中で、私が納得いくのは、皆さんがさっきから違和感を持っているキャリア教育の部分は、キャリアという言葉は別として、ここは推進してもらいたいというふうに思っているんです。それは、本校もそうだし、武蔵野の子どもたちが意識調査をかけると、将来社会に役に立つ人間になりたいかという問いがものすごく低いわけです、そういった肯定的な意見が。それを考える中で、ここに武蔵野が力を入れましょうというのは、私はすごく納得がいく。

環境教育、情報教育については、武蔵野で絶対やらなければいけない、武蔵野だからというところの根拠は、余り自分としてはまだ感じられていません。

特に、キャリア教育は狭い意味でとってしまうと、職業教育というふうな意味でとってしまうと、それは間違いだろうというふうに思っています。特に、小学校は今どんな職業を選びますかなんていうそんな世代ではないわけで、夢はパン屋さんやパテシエだとかいろいろ持っていますけれども、それよりも今の大人社会に対する信頼感とか、近くにいる大人が自分のあこがれのもてる生き方をしている、そういう大人のモデルが必要だとか、さっき松澤先生が言われていた部分と重なるんですけども、社会の信頼感とか、大人への信頼感、こういったものを養うことが小学校の恐らくキャリア教育なんだろうというふうに思っています。

武蔵野でもすばらしい生き方をなさっていた方たちがたくさんいるわけです。これは、すぐできるかどうかわかりませんが、地方などに行くと、郷土に尽くした人々み

たいな副読本が例えばあったりして、それが使えるような地方もありますけれども、武蔵野も多分掘り起こしていくと、そういう方たちというのはたくさんいたんだろうというふうに思うんです。例えば、私が前にいた関前南小学校の近くには御門訴の碑があって、武蔵野の周年のときには市民劇団が朗読劇をあそこの何とか座、忘れてしまいましたけれども、劇を披露してくださいましたけれども、とても感銘を受けましたし、そういう地域に根ざしたいろいろさまざまな生き方に学ぶというようなことは、武蔵野は大切にしていかなければいけないことだろうなというふうに考えています。

○松澤委員 さっき、私が食育で言ったところは差しかえ版は直ってました。古いほうを見てました。

○安藤委員 前進座ですね。

○田中委員 前進座……、そうですね。

○小島副委員長 環境教育、情報、キャリア教育も非常に定まってないわけです。普遍的で共通理解ができていない。それだけにはっきりさせていく必要があると思います。

環境教育は、東京都が取り組んだのは平成3年の明けてすぐのころなんですけれども、そのとき私は担当していたんですが、この課題認識のところの尊重する精神ということと、とにかく環境教育というのは実践力だということ、もう一つは各教科を通して知的理解をして、環境とは何か、あるいは環境と人間とのかかわりは何かという、そういうことをやっていかなければいけないというようなことで出発しているはずなんですけれども、そういう環境教育で大事なことはこういうことですよということを押さえて、そして、今特に問題になっているのはこういうことなんですという、そういう落とし方をしていくと理解が図られるんじゃないかと思うんです。

情報教育もこれだけやって情報教育ではなくて、これはパソコンを視野においた情報教育が強調されているわけなんですけれども、情報を集めて処理して活用するというのは、先ほどありましたけれども、活字で拾ってくる場合もあれば、インタビューして直接聞いてくるのもあれば、見学して目で見るというのものもあるわけです。そういうもの全体の中で、今特に問題になっているのが、あるいはここではっきりとした方向を出しておかなければいけないのが情報モラルとかインターネットのトラブルなんだというようなそういうこと。

それから、キャリア教育についても進路指導でもいいんですけれども、進路指導というと進学指導なんです、ほとんどが。そういうふうに狭くなってしまって、どこの学校へ行くためにどうしたらいいのか、そうではなくて、仕事をする人を見てその生きざまに触れる、あるいは自分のしたいこと、あるいはなりたい自分、あるいはどういう仕事

をしたいか、ぐるぐる変わっても構わないわけです。そのために、自分はこういうことを頑張るんだとか、あるいはそのときにちょっと思ったことが原体験になって将来に結びついていくということで、大学を卒業しても仕事にもつく意欲がない、あるいは実際に仕事についていても、とてもよくやるから、責任ある立場でやってもらいたいということで、正社員の口を持っていくと、そんなことだったらやめますってやめちゃうとか、そういういろいろなことがある、そういう背景を盛り込みながら、本来の何々教育はこうあるんだということを示して強調点を出していくと、もっと理解しやすいんじゃないか、そんな感想を持ちました。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

それでは、後半部分につながる議論になっておりますけれども、資料3の説明を承っておりませんので、これにつきましてご説明いただけますでしょうか。

○石代統括指導主事 それでは、資料3ということで3枚配らせていただいています。今まで、この体系について何回かやってきたと思います。

そこには、若干触れられていなかったり、まだまだこの中でもご意見等あると思いますので、今後の議論の中で出していただければと思っております。この後半からは、中間の報告に向けてかじ取りを切っていくと、そのように考えております。

これは、どのような形でということなんですけれども、資料3は今まで委員の方々にご議論いただいた意見、あるいは事務局で出てきたデータをお出ししたものでございます。そして、それを学力、心と体、そして教員・学校、そして地域の4つの項目に振り分けさせていただきました。

今まで、委員の皆様が発言していただいたことは、必ずしも委員会の中で合意を得たということではなかったですし、また議論の中で話題にのぼらなかったこと、言い忘れていたこともあると思いますので、これを参考にいただきまして、一番最初に説明いたしました武蔵野市が目指す教育の方向性、あるいは今後取り組むべきことについて、各委員からご意見、あるいは協議をしていただきたいと思いますので、よろしく申し上げます。

○葉養委員長 もうそれでよろしいですか。

○石代統括指導主事 はい。

○葉養委員長 この「デ」と書いてあるのは。

○石代統括指導主事 「デ」というのが、今までお出ししたデータの中から読み取れるものでございます。それ以外のものが委員の皆様から出されたご意見だというふうに考えていただけたらと思います。

○葉養委員長 どうもありがとうございます。

これから先は全体を視野におさめながらご議論いただければと思います。先ほどの現代社会の諸課題に対応する教育の推進、ここの議論と全体をどうとらえるかというのは、かなり密接にかかわりを持ちますので、先ほどの箇所と関連してご意見を承っても構いませんので、ご自由に発言をお願いしたいと思います。

何かございませんでしょうか。今までの議論の中で抜け落ちてる視点とか、あるいは特にこういう領域をこれからの教育基本計画のコアとしては重視していくべきだとか、論点はいろいろな側面から出てくるような気がいたしますけれども。

○原委員 さっきも出たんですけれども、ずっと追いかけてきた中で、ここまでやってきた中で、全く触れられていないのがボランティアなんです。実際、私は三中と六中しか知りませんが、武蔵野の子どもたちは結構地域の当時のケアグループの方々とか、ケアグループが何かと一緒に……、

○萱場委員 地域福祉の会。

○原委員 福祉の会と一緒にあったり、あるいは地域の青少協の方々とか、地域と関連したボランティアを結構子どもたちはやっているんです。でも、ここまでずっと通してきた中では、それが全くなかったかなという気がしているんですけれども、豊かな心をはぐくむというよりは、私はボランティア活動ということも一つの大きな柱になっていいんじゃないかというふうには思っているんですけれども。きょう事前にいただいた資料を見ながら、その視点が欠けてないかなということを感じてきょうはきてるんですけれども。

○小島副委員長 そうすると、どの辺に続きますか。

○原委員 これは2つ目の豊かな心の育成かなという気がするんですが。ただ、主要事業の取り組みを読んでいくとちょっと違うなという気がしていて、どこがいいのかなというところはちょっと迷ってましたけれども。

○葉養委員長 どうもありがとうございます。

それで、きょう配っていただきました武蔵野市の特別支援教育、この中に教育医療福祉によるという、これはかなり特別支援だけじゃなくて、教育活動そのものがベースみたいな分野です、教育、福祉、医療というのは連携しているところが現実にはあるんじゃないかと思います。保健所との連携とか、福祉部門との連携とか、そこら辺も何か豊かな心に入るのか、健やかな体もかかわるのか、そういうようなものを入れ込んだほうがいいのかなど。

ほかにはいかがでしょうか。何でも結構でございます。ご自由に。

○安藤委員 次回休みなので、意見を出せる分だけ出しておきたいと思うんですけども。

この資料3の中を読んできて、ちょっと補足だけしておきたいと思うんですけども、先ほどのお話にもありましたけれども、コンピュータの前に紙ベースのものをちゃんと読めるようになっているかどうかということがあったんですけども、その部分を指導するのに、先生方がどれだけ子どもたちに教えられるのかなというのがありまして、司書教諭のお免状を持っている先生方が必ず配置するよというふうになってきているんですけども、なかなか機能していないという言い方大変失礼なんですけれども、中学校のほうはよくわからないんですけども思っています。

それで、図書室サポーターというものがついたとは思うんですけども、先生方の情報リテラシーをつけて、それを子どもたちにと、先生を教育するというのも一つあると思うんですけども、私は図書室サポーターをもっと教育というか研修して、もっと利用すればいいのよというふうに思っています。昔とったと何とかとはいえ、司書のお免状を持っている人たちですので、とはいえ世の中変わりに変わってきていて、司書も新しい勉強をどんどんしていかないといけない時代なので、予算をつけなければもちろんいけないんですけども、研修をしてその人たちの力を使って紙ベースでのしっかりとした情報リテラシーをつけた上でパソコンのほうにいければ、しっかりとした力がついていくんじゃないかなというふうに思っています。

私、中学校のほうはこう言うのは失礼なんですけれども、たった3時間ではサポーターというのは、事務的なこと、それからお部屋に3時間いるというのは中学校においてはすごく大きいと思うんですけども、もっともっとサポーターの人たちにブックトークしてもらおうとか、それこそ資料の読み取り方の指導をしてもらおうとか、そこまで読書指導の先生と組んでやっていけばもっともっと実力のつく授業ができるんじゃないかなというふうに思っているのよ、ちょっと補足だけさせていただきます。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

ほかにどうぞご自由に、皆さんの時間ですので、私もなるべくきょうはしゃべらないように。

○石代統括指導主事 事務局からというわけではなくて、本日小山田委員が所用のため欠席しています。それで、策定委員会を振り返ってということで、何点かこの部分でご意見をいただいておりますので、ここで発表したいと思います。

まず、心と体のところを中心に一つ言いたいということで、まず1つ目は先ほどもありましたように、セカンドスクールという文字がなかったのよ、流行のセカンドスクールというのよ、武蔵野の教育むさしのらしさということをあらわす上では、出していっ

てほしいということが1つ。

それから、小山田委員は日ごろの生活指導が非常に大切で、社会性の育成、そして適切な人間関係という2つのキーワードを出していただいています。

今後、武蔵野の教育を進める上で、外せないというか前提にこういったものを置いておきたいということで、この2つ、社会性の育成と適切な人間関係ということで出していただいていますので、よろしくお願いします。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

それでは、他の委員何かお気づきの点どうぞ。

○小島副委員長 確かな学力のというのは、資料1についてのあれなんです。外国語活動というと、学習指導要領のレベルでいえば小学校だけです。小・中学校共通の施策の方向性ということで、きちっと表現するということが必要だと思うんです。確かな学力は学校教育法の30条2項から拾い出して、1つ目が知識、技能、2つ目が思考力、判断力、表現力、3つ目が学習意欲と、学力の中身が明記されているわけです。

それから、健やかな体のほうも、体力と健康ですから、中身が特定されているわけです。

豊かな心の育成のほうは道德教育って物すごく大きくくっついてしまって、何をやるんだということになるので、特徴的なことをもう少し下のレベルで上げていく必要があると思うんです。

なぜ、そんなことをいうかということ、学校が学校として教育を進めるという核があって、それを行政は行政としてやるべきことをやるし支援をする。それから、保護者や市民がサポートするという、その関係をはっきりさせるために、学校がやるべき内容ははっきりと出しておいたほうが良いというふうに思います。

以上です。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

学校の役割は、現実に絞り込まれてるんです。授業時数というのは設定されているわけだから。絞り込まれた授業時数の中身を質的に高いものにするという、そのための工夫をどうするかということなんだろうと思うんです、本質論は。

何かほかにお気づきの点ございましたら。

情報のところで、つまらない話ですけども、携帯の取り扱いとかそういうのは武蔵野はどうされているんですか。情報教育の何も記載がないから。

○磯川委員 石川県がこの前やりましたね、携帯持たせないって。

○安藤委員 ここに書いてあるセーフティ教室とか、そこでやっていると思います。

- 原委員 セーフティは大体今は情報機器に関するモラルのところが多いです。
- 鈴木指導課長 武蔵野では、原則学校には持ってこないということで、持たせないというわけではありません。日ごろ持つわけですから、その中できちんと安全な取り扱いについて理解を深め身につけていくことが大切です。セーフティ教育にもそういう視点から取り入れているような状況です。
- 原委員 持ってきてはいないと思っています。少なくとも目には触れません。
- 葉養委員長 かばんの底に入ってるかもしれない。
- 原委員 保護者の方の意向で、部活で帰りが遅いときなどは心配だからというのがあるみたいです。ですから、100%持たせてないかということとは言えませんが、少なくともそれがもとで学校の中で何か生活指導するというようなことは特段ありません。全校わからないですけれども。
- 葉養委員長 ぼちぼち中間まとめの取りまとめの準備に入っていないといけないんですけれども、一番悩ましいのがキャッチフレーズをつくるのがいいかどうかということがあるけれども、一言で武蔵野市教育基本計画の理念は何なんだということ、それを一言でなくてもいいんだけど、2個とか4個とかになるかもしれないけれども、何か柱を設定していかないといけないんです。
 それがなかなか悩ましくて、そこら辺の少しご議論いただければと思うんです。お知恵をいただければ。結局、そういうものが全体のベースにある、大げさにいえば哲学、思想になっていくので、各論として思想、哲学に立脚していろいろなものが出てくるといっているんだらうと思うんです。根っこにあるものは何かというそこら辺にちょっと引きつけたお話をいただくとありがたいんですけれども。
- 安藤委員 どういう言葉にしたらいいかというのはわからないんですけれども、ずっといろいろ議論してきて、私は武蔵野の子どもたちで一番心配なのが、これは親のせいだと思うんですけれども、テストの点とか学問ができるできないということにすごく執着している地場があって、その中で資料3の3分2のところを書いてあるんですけれども、テストの点でもって自分を逆に評価して、私はやっぱりだめなんだというような自信のなさが見受けられるという、この部分がすごく武蔵野の子どもたちでは心配です。
 ですから、その部分も何とかしようという気持ちみたいのが理念にあらわれるといいなと思うのですが、いい言葉は何も浮かばないんですけれども。
- 葉養委員長 学校と地域の連携とかそこら辺というのは、何か理念の一部に組み込めるのか、それとも学校を大事にする風土が強いんだから、そこまで学校、地域、協働学校みたいなどころまで打ち出さないほうがいいということなのか、そういうあたりはどう

なんですか。学校、家庭、地域の連携みたいな、そういう話というのはどうなんですか。

この体系案でも地域と協働する学校という囲みが3つ目にあります。ここら辺の重点の置き方というのはどんなふうにお感じになりますか。先生方が大事にされなければいけないというので、先生方を大事にする教育というのが武蔵野の教育だというふうに考えるのか、そこら辺のスタンスというか、それはいかがなものでしょうか。

○安藤委員 どなたもいらっしゃらない。

○葉養委員長 なかなか難しい。

○安藤委員 ただ、あえて地域、地域と言わなくても、そこそこ地域との連携はできているというふうに思うのですが、そこに視点を持っていく。学校の先生は……

○磯川委員 私はそういう意味で、昼間の時間というのは武蔵野にいるわけじゃなかったですからあれですけれども、イメージとしては地域の中の学校という意識は非常にあるという気はします。それと、セカンドスクールもそうだし、それに似たような地域のお父さん、お母さん、サマージャンボリーだとか、それこそ本郷さんなんかはかかわっておられるんでしょうけれども、そういう部分で、地域が子どもたちの教育にかかわっている部分というのは、結構根づいているというふうに、外からですけれども見えますよね。それは、非常にいいことだというふうには思います。

○本郷委員 地域とか学校とかという言葉の枠とか型とかから入るんじゃなくて、教育という中身、いい言葉がなかなか出ないんですけれども、そういう中身のほうの理念を出したいなとは思っています。

○磯川委員 私の気持ちとしては、どっちかというところセカンドスクールというのが、非常に武蔵野の場合有名になり過ぎたという部分もあるので、むしろファーストスクールの部分の充実という部分を、この基本計画の中ではしっかり取り上げてほしいなという気持ちは持っています。

ただ、余り議論が拡散しちゃうとなかなか難しいです。確かに、教育の現場が抱えておられる課題というのは随分いろいろな、世の中の動きがそのままその学校に影響しますから、さっきからのお話で情報にしても環境にしても、みんなそれぞれ学校としてどうとらまえるんだということは当然のことです出てくるんですけども。

例えば、地域に学校の授業が公開されてて、私も時々見に行くことがあるんですけども、そのときに受けてる授業というものが質的にどうなんだという気持ちはちょっとあります。非常に、いい授業を見せてもらうケースと、もうちょっと何とかならないのかという感じで受けるケースと両方ありましたけれども。

○葉養委員長 1つだけ、ちょっと私の意見を言わせていただくと、社会学者がよくおっ

しゃるんです。例えば、放送大学の、千葉大におられた先生とか女性の先生、長野県の教育委員会で、基本計画をつくる懇談会をつくりまして、私教育委員やってましたので、皆さんのご意見を承っていたので、そのときに子どもの貧困というテーマをぜひ柱として入れてほしいというのが出て、結局入らなかったんですけども、長野県の議決した長期計画には入らなかったんですけども、社会学者ってそういう言い方をする人というのは少なくないんです。

だから、長期ビジョンで考えていくと、学力そのものが家庭の経済状況とか家庭の文化とか、あるいは文化の底にある学力的要因とか、いろいろなものによって規定されてしまっているという、学力の再生産というか、その子の生き立ちみたいなものが学力を再生産しているという、そういう少し日本社会も危ないところにきているという、そういうニュアンスも含めながらだろうと思うんですけども、国際機関が最初言ったんです、子どもの貧困ということ。これは、別に特定の政治的流派の人が言っているのではなくて、ユネスコとかそういう国際機関の中から出てきて、日本の社会学者、別に左翼でも何でもない人が日本社会を見つめるときに、そういう視点も入れ込まないというようなことをおっしゃってるんです。

例えば、そういうことはどう考えても、武蔵野というのは平準化された社会でそういうことはあと20年たったらどうかわからないけれどもということなのか、そういう面もあるのか。

あと、もう一つだけ申しわけないんですけども、ヘルシースクールという言葉がよく出てくるんです。健康という概念です。学校の健康とか健康な学校、大人自体も意外と日本人というのは、自分の健康に対する関心が強くないという感じがします。医学系の人というのは。医学系の方は、自分の健康、体の健康、心の健康を含めて健康状態を維持するということに相当心を砕いている。そういう人とつき合っているとすごい勉強になるんですけども、それを学校という組織の健康とか、教職員の健康、心の健康、体の健康、あるいは子どもの健康、地域社会の健康と、健康という概念を拡大して行って、社会とか教育の見つめ方を再検討していこうという視線もあったりするんですけども、あとは皆さんにお任せいたします。何か新しい切り方が全く必要がないのか、あるいは少しそこら辺も加味して考えていったほうがいいのか。まだ、まとめ上げるのに何回かございますので、ちょっとそういうあたりの煮え切らない話でも結構でございますので、課題提起みたいな形で思いついたら何か切り込み方がございましたら、ちょっと出していただくとありがたいんですけども。

○安藤委員 先ほど、子どもの貧困の部分で、例えばそれは親が子どもの面倒を見なくな

ってきていて、子ども自身にきちんとした生活習慣がついていない、例えば髪の毛を全然切らなかつたりとか、お風呂に入らなかつたりとか、そういうのも……

- 葉養委員長 そうですね、そういう親に追い込んでいる、また経済的要因とか社会の構造的な要因が絡んでいるという、社会学者はそこまで見ていきますから。だから、結局親がおかれている貧困というのが子どもの学力とか育ち方まで規定してしまっているという、だからある意味で子どもの学力というのは親の貧困というのが根底にあって、そうするといい学歴が持てないです。子どもの学力がついていかなければ。そうすると、貧困というキーワードでぐるぐる再生産される、固定化された社会になってきているんじゃないかという、ちょっと危機感を喚起するような言葉なんです。

そういう分析が学校選択制などでもちょっと出てきているんです、経済学者の分析で。まだ、マスコミまで広がってないようなものの中にも、ちょっと有名な経済学者による分析とか、学校選択制と選択行動とそれを規定する社会経済的な要因との関係とか、それがちょっと出てきているところがあるんです。

そういう社会の二極化みたいな現象というのは視野におさめないで、専ら教育という領域だけで語っていけばいいのか、もう少し萌芽的にでもいいから、ちょっと視野におさめるようなところまで含み込んで考えるのかとか、そういうようなこともあるのかなと。私自身何もまだ結論が出ているあれじゃないんですけれども。

- 磯川委員 今の子どもたちというのは競争下にあるんですかね。
- 葉養委員長 すさまじい競争状態だと思います。うちの子どもが大学入ったばかりだから、私が学生だった時分は団塊の世代のすごい競争だったけれども、それに輪をかけたような競争状態の中で、今の子供で生きているなというのはつくづく感じて、ここの武蔵野の子は学力が平均値で高いということは、恐らくそういう非常に厳しい状況の中で育っているという面は、ほかの地域よりももしかしたらあるかもかしれないです。

- 安藤委員 ストレスとか。

- 葉養委員長 ストレスとか心の世界とか、そこら辺の厳しさというのはむしろ武蔵野だからあるかもしれないです。

- 磯川委員 何となく最近の子どもたちはひ弱に感じませんか。そのひ弱さって何かというと、人間関係をつくるのが余り上手じゃない。葛藤を非常に恐れてそこから逃げていくというか、子どもたちが集まって部屋にいて、昔だったら我々のときってだべって、わけのわからないことをいろいろしゃべっているということがあったんですが、しゃべらないで、みんなそれぞれ1人はテレビゲームやってる、1人は携帯の画面で何かやっているみたいな感じの集まり方をしているようなケースがあるんです。うちの子どもを

見ている。

それは、そういう社会構造があって、そういうふうにも子どもたちの姿というのが変わってきているんだという、頭のどこかでは理解しているようなところがあるんですけども、何となくひ弱になっているような気がしているんです。ひ弱になっている部分と、この何をどうやってひ弱じゃない形にするんだ、具体的にいったら考える力、行動する力とかエネルギーを持った子どもをつくりたいという思いが非常にあります。

○葉養委員長 前に、原先生が特別活動というのを再評価というか、もっと重視するべきだというようなことをおっしゃったことがあります。それはそういう話とかなり結びついている話じゃないかと思います。

○原委員 もしかしたら、以前にもお話ししたかもしれませんが、例えば本校の合唱コンクールなどで……、その前に3年生は面接練習をするんですけども、3年間で一番の思い出は何と聞くと合唱コンクールだというんです。優勝したんだねと聞くと、そうじゃなくて、本番を迎えるまでに歌をつくり上げていく中で、物すごい言い合いをやってきた、その中でお互いが理解できていい合唱になったことで思い出に残っているんだという、そういう言い方をします。

今のお話のように、本音をぶつけ合って葛藤しながら、お互いの本音を聞き合いながら、そのよさをお互いに持ちながら何かをつくり上げていくという、そういう活動が多分今の子どもたちにはないんだろうと思うんです。ですから、私はそういう特別活動を軽視してきているここ10何年の教育課程の学習を見ていると、ただでさえ少子化で家庭の中にもそういうことがない子たち、地域でも群れなくなっている子たちだからこそ、学校の中でそういう場を意図的につくってやっていかないといけないだろうと。

これは、なかなか授業の中ではそういうものは求められないので、集団活動通してという冠はつくわけで、そういう意味での特別活動というものを重視していかないと、今の子どもたちの姿が生まれてこないんじゃないのかなというふうには思っています。

例えば、学級活動などの週1時間の時間でも、昔でいう本当の意味での学級活動はうんと減っています。どっちかという学校行事の下請けをやっていたり、物事を決めるといっても、自分たちの生活をどうしていくかということでの話し合いを通して物を決めていくんじゃないで、例えば運動会の選手を決めるための話し合いを学級活動でやっている、そういう意味では、私は特別活動というものの衰退がそういう子どもたちの人間関係の希薄さに輪をかけているんじゃないかなというふうには思っています。

○葉養委員長 人間関係の希薄さとか断絶というか、親自身が子育ての孤立化とか、砂漠

の砂のような親とか、いろいろな言葉で表現されるような状況の中におかれていて、さて具体策として何があるだろうか。隣近所、近隣関係というのは武蔵野というのはどうなんですか。昔の近隣関係というのは向こう三軒両隣とか、谷中とかああいうところは今でも残っているのかもしれませんが、そういうのが昔の村なんてあったんですけども、武蔵野というのはどうなんですか。

○安藤委員 町内会がないところが多いですから、回覧板も回ってきませんし、ごみも戸別になりましたし、お会いすればもちろんごあいさつはしますけれども、田舎のようなつき合いはないです。

○葉養委員長 必要がないんですね。

○安藤委員 そうですね。

○磯川委員 そういうのは、子どもたちの部活動というのは、今おっしゃられた特別活動とはまたちょっと違うのかもしれないですけども、自分の子どもの成長を見てみると、そういうところで人間関係が鍛えられたりしたんじゃないかなという気はします。その部分というのは、たまたま学校の先生が指導していただいたというケースがありましたけれども、必ずしもそうはいかないですよ。

○原委員 部活動は少し違うと思うんです。それはなぜかといったら、それをやりたいという子たちの集まりなんです。ですから、さっきの合唱コンクールだとやりたいという子たちばかりの集まりじゃないんです。ですから、そこにもっと複雑な葛藤があるんだろうというふうに思います。

それから、集団自身も集まってきた必然性みたいなものが、学級にはそもそも基本的にはないわけです。部活動にはあると思うんです。そこで違うんだろうというふうに思います。もっと、そういう意味では学級活動のほうが厳しい中での集団形成だろうというふうに思っています。

○葉養委員長 教員の世界もかなり変質しているんじゃないですか。昔は、赤ちょうちんの世界があったりとか、赤ちょうちんで先輩から話を聞くことが、メンターティーチャーの役割を果たしていたとか、昔はそういう話をよく聞いたんですけども、今はそういう赤ちょうちんの世界というのはほとんどなくなっている。

○原委員 うちの学校はしょっちゅうあります。

○葉養委員長 原先生の部屋があれですか。

○原委員 知らないですけどもよくあります。ただ、教育談義はなかなか話題になってないかもしれません。そういう会はそこそこあるにしても、話題性が昔と違ってきているかなという気はします。

○葉養委員長 もし、赤ちょうちんみたいな世界が意味を持つとすれば、それがなくなったのであれば人工的につくるしかないんです。仕掛けを考えて。それがメンターティーチャーの構想であったりとか、新しい装いをとってメンターティーチャーのシステムを武蔵野の各学校に張りめぐらそうとか、可能性があるかどうかという問題がありますけれども、指導教諭制というのがちょっとそこら辺の新しい職制で、指導教諭というのが主幹教諭、指導教諭というのが出てきて、指導教諭が都の説明だと、メンターティーチャーみたいな役割を果たすというんですけれども、制度化されるとちょっと職位みたいな受けとめ方が出てきて、アメリカの学校、ロサンゼルス界限にいくと、5年とか6年ぐらい、先輩の先生が新しく学校に入ってきた先生に教え方を指導するんです。

教員になる前の二、三週間缶詰めにして、ロサンゼルスに行ったときは教会を使ってみましたけれども、そこに寝泊りさせて、ワークショップの形式で五、六人の、9月1日から教員になる人を先輩の先生が、例えば数学を中学校1年生に教えるときに、こういうことを生徒が言ってきたらどう反応するか、かなり細かい指導をしていたんです。それを二、三週間やるプロセスがあるんです。

その後は、今度はメンターティーチャーという肩書きの先生は1年かけてずっと面倒を見る。そのかわり2万円ぐらいでしたか、何ドルか手当がつくんです。それは、メンターティーチャーと呼んでました。

そういうケアをするというか、導く役割をする人とか、先生が苦しんだときに助言をする人みたいなものが、子どもの世界も全く同じだと思うんです。先生の世界も必要になってきているというか、今の世の中。

○安藤委員 普通会社に入ると、手取り足取り仕事をまず教えてもらって覚えていくんですけれども、ということは先生方はいきなりぼんと授業が始まって、自分の方法で覚えていくしかなかったということですか。

○葉養委員長 どうですか。

○原委員 とりあえずはしました。

○小島副委員長 昔はそうです。

○原委員 私はしょっちゅう授業をとめて、ほかの授業をやっている最中の国語の同じ教科の先生のところに行きました。文法の授業なんかめっちゃくちゃだったと思います、最初は。すっかり忘れてましたから。少なくともそのまま流してはこなかったつもりでいます。恥ずかしいけどちょっと待ってと子どもたちに言って、確認して聞いてくるって言ったことは数え切れないほどあります。

○安藤委員 もしかしたら、今の先生方の中で、それこそ初心者の方々は苦しんでいる可

能性もあるし、それをきちんとクリアできないと、それは子どもは見抜いちゃいますよね。だから、それは子どもが先生を頼りにしなくなる原因にもなり得ると思うんですけども。

○原委員 例えば、行政の文章の書き方だとか、文章の作り方だとか、それは2週間なり何日かかけて教われば覚えられるだろうと思うけれども、授業をどうやっていくかというのは教えるものじゃない、それがそのままできるものじゃないと思います。形はできるかもしれないけれども。形を教わることはできても、それだけでは決してうまくいかないだろうというふうに思います。そこが、難しさであって、だれでもこの教材を使って、こういうふうに発問してこういうふうにやれば、だれだってうまく授業がいくんだというのはないと思っています。あるときそういうことをやった人がいましたけれども。だれだっけ忘れちゃった。

○小島副委員長 向上洋一さん。

○原委員 いましたけれども、結局挫折しているというか、破綻しているというか、結局うまくいってない部分があって、オールマイティにだれもができるようなやり方は多分学校の先生という仕事にはないだろうというふうに思います。そこら辺を勘違いしている方が結構多くて、こういう形でこうやってやればできるんだというような、学校の先生の仕事というのはそうじゃないだろうと思います。先生という1人の人間と子どもの個性と、その問題もあるんだと思います。

○安藤委員 すごく研究授業が盛んですよね。これは、武蔵野の特色ですか、それとも全国的にどこでも研究授業はよくやられているんですか。

○原委員 武蔵野も最近です。ここ10年ぐらいじゃないですか。

○葉養委員長 学校差、地域差が相当あると思います。

○安藤委員 私の勤めている小学校では、ほとんど毎月必ず1回ぐらいの頻度であります。それは、ほかの先生の授業を見るというのはすごく勉強になるんでしょうし。

○葉養委員長 OJTが重要なんです。オン・ザ・ジョブ・トレーニングという、偉い先生の話聞くよりもはるかに、職場でいろいろ相談したほうが役立つんです。学芸大に27年間おりましたけれども、赴任した学校によって、2年後って全く変わるんです。それほど違うんです。全く、何もしない学校もあるし、歩き方から、先輩の前を歩くのかって怒鳴りつけられたような学校に赴任した学生というのは2年たつと全然違っちゃいます。だから、学校って相当作り方が違う。多分、武蔵野はいい地域ではないかなと思います。

ただ、中央区とか千代田区で聞いても昔はすごかったんです。ああいう学校に行くと、

2年ぐらいたつと、すごくいい先生だったんだけど、だんだん落ちてきているという話を指導室長から聞いたばかりです。異動の関係もあるし、昔の文化が弱くなっているという話は聞きました。子どもの世界もそういうケアリングみたいな縦割りで上の上級生が入ってきた後輩の面倒を見るという、縦割りのケアリングの関係というのが崩れてきているんじゃないんですか。

- 原委員 でも、一生懸命維持はしてます、しようとしてます。3年生がモデルにならない中学校じゃだめです。
- 葉養委員長 そういうケアリングとか、心の健康とか、そういうあたりにうまい言葉があれば、教育基本計画のかなりコアになる部分かもしれないですね。先ほどおっしゃっていただいたように、受験という体制の中で相当苦しめられていると思うんです、子どもたちというのは。親はテストの点数とか順位に関心を持つから、余り見えないんだけど、子ども自身は相当痛めつけられているという実態が、こうやって学力の高いところというのは、ほかの地域でもある可能性があると思います。そこら辺を入れていってつくったほうがいいかもしれないです。
- 安藤委員 かわいそうなくらい親の期待にこたえてあげようというふうに子どもたちになっているなど感じてます。
- 原委員 そういう親の価値観を変えるような基本計画にしていだけるといいなという気がします。
- 安藤委員 そうですね、そっちですね。
- 松澤委員 今、この時点で、何が強い言葉かという、もともとスタートのときに、こういう視点で見ようとか、何が土台だからこうということは余りじっくりやらずにいて、この4つのことというのは教育委員会のほうで大体最初からある程度出ていたことですよね。一通り見てきた中で、何がいい言葉といってもなかなか正直言うと難しいかなという思いがあります。

それから、さっき磯川委員が全体に弱くなっていると言いましたけれども、私も今の子どもたちが生きる力がどんどん弱くなっているから、生きる力、生きる力って言っているわけで、そこら辺で余り流行を追ったちまちましたことじゃなくて、武蔵野は正々堂々と教育の本質を、よく校長会でも武蔵野は王道を行きましょうよなんてことを論議の中で言ったことがあるんだけど、そういうことが言えるといいのかなという気はするんです。それがどういうことであるかとか余りあれなんだけれども。

私自身は、子どもたちに何を育てたいかというときに、生きていく力の基本って何かになって考えると、1つは健康な体であり、それから2つ目は自分からやろうとする意思、

態度、能力、それから3つ目は自分以外の人とよりよい関係をつくっていく、この3つが人間の生きる力、それをしっかりやっていくことが子育ての一番大事なことかなというふうに私自身は思っているんです。

そういうような、そんな言葉じゃなくてもいいんだけど、何かそういう一番土台、基本をしっかりやっていく、それは学校も地域も教育委員会も一緒になってつくっていくというようなイメージのことができるといいなというふうに思っています。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

あと2分ぐらいになりまして、多分、基礎、基本というキーワードに収れんしてまとめていくということなんだろうと思うんですけども、ただ基礎、基本とただだけでは武蔵野じゃなくたって、全国各地も基礎、基本だという話になってくるので、少し武蔵野らしさが出てくるようなことも、また事務局と相談しながら、何かいい言葉がないか検討させていただきたいと思います。

それでは、次回の日程について事務局のほうからご説明いただければと思います。

○秋山教育企画課長 ありがとうございます。

今回は、最初の日程表に示されておりますけれども7月29日水曜日になります。時間は午後7時からで、場所は811会議室。前々回やった西棟の8階になります。

今日いただいた意見とかキーワードになる語句とかその辺はこちらのほうで、目指す姿みたいな形でまとめて示していきたいと思います。また、中間まとめに入っていく部分になりますけれども、中間のまとめの骨子等を次回は示していきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

また、今の意見の中でも出し切れなかったところがもしあったとすれば、電話でもファクスでも構いませんので、目指す姿等ご意見いただければありがたいと思います。

以上でございます。

○葉養委員長 どうもありがとうございます。

それでは、本日は長い時間ありがとうございました。

午後 9時00分閉会